

すぎなみ産

vol.3

2019

令和元年10月発行

遊具を作り続けて80年、
日本初の遊具専門メーカー

ミニベロに特化した日本随一の自転車店
芸術と生活が交差する竹製品

日本で初めて
ペーパーコースターを製造販売

長い歴史を紡ぐ
杉並の仕事

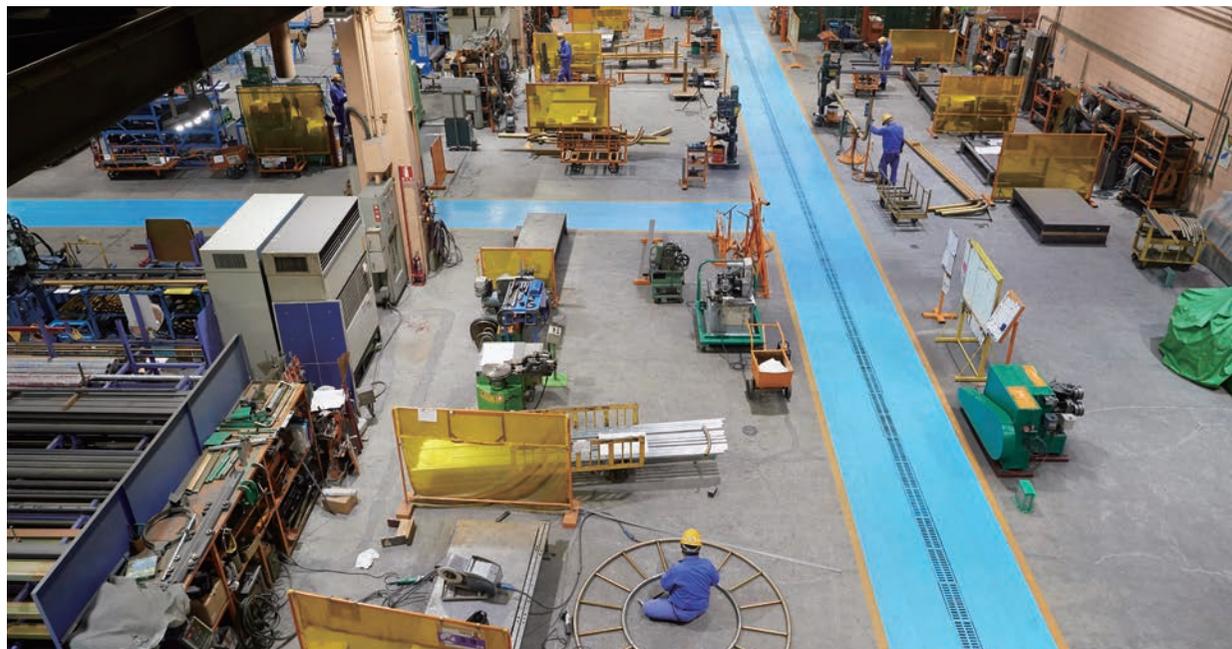
杉並区

多種多様な遊具や健康器具、 休養施設の専門メーカー「日都産業株式会社」

遊具を目にした途端、多くの子どもたちは
一目散に駆け寄り、無我夢中になって遊び始める。
結果的におのずと体を動かすことになり、運動能力も養われていく。
このように、遊具は子どもの心身を健全に育てるうえで欠かせないもの。
創業80周年の日都産業は、杉並から全国各地の公園や校庭・園庭などへ様々な
遊具を供給している会社だ。今回は、その製造現場である羽村工場取材した。



子どもの健やかな成長を育む遊具を、 杉並から全国の公園、校庭・園庭へ…



羽村工場の内観。通路は
ブルーに塗装され、物を置
かないようにルール付けさ
れているという。

手を動かしながら遊具を
デザイン。安全基準を学ん
だうえで形を考えている。



1mmでも寸法が違っていれば安全性を損ねることもある。
工場内で入念にチェックする。写真は「リンクミニ」。



自治体などから依頼を受け、自社製品・
他社製品の区別なく公園内に設置され
た遊具のメンテナンスを行う事業も展
開。実際にプランコに乗ったり、使ってみ
ながら不具合がないか点検する。



災害時に使用できる、公園の防災用品も作っている。
写真は有事の際は座部を外すことで、煮炊き
をするかまどとして使用できる「かまどベンチ」。

企業情報

- 会社名：日都産業株式会社
- 所在地：〒168-0081 杉並区宮前5-19-1 (本社)
〒205-0023 羽村市神明台4-5-1 (羽村工場)
- 代表取締役社長：山中慎吾
- 設立：1944 (昭和19)年
- 遊具・健康器具・休養施設の
設計・製作・販売・保守管理等
- TEL.03-3333-0210 (代) FAX.03-3333-0631
- http://www.nitto-sg.co.jp/



プランコフック。よく見れば、ロゴマーク
が入っていることが分かる。またイタズ
ラによる落下を防ぐためフックカバー
を自社で開発し、特許取得もしている。



ブランコで全国トップシェア! 日本最初の専門メーカーとして 遊具作りにこだわり続ける日都産業

子どもの頃、誰もが慣れ親しんできたブランコや滑り台。ただ、遊ぶことに夢中だったり、目の前に存在するのが当たり前だったりして、「これって、誰が作ったのかな?」と改めて考えた人はそう多くないだろう。杉並に本社を構える日都産業は、1939(昭和14)年に創業した遊具の専門メーカーだ。日本中の公園や校庭・園庭に、この会社が作った様々な遊具が設置されている。幼い頃、あなたがいつも遊んでいたブランコも、日都産業の製品だったかもしれない。



回転するジャングルジムを 日本で初めて開発したメーカー

公園には滑り台やブランコ、校庭・園庭には鉄棒や登り棒があり、いつも子どもたちが戯れている——。こうした光景は、全国津々浦々で当たり前のように見かけるものだ。そして、誰もが子どもの頃には、同じように遊具が遊び相手だったはず。目の前に迫りつつある東京五輪に出場するアスリートたちにしても、彼らが身体能力を高めていく第一歩となったのが遊具であったかもしれない。

80年もの歴史を誇る日都産業は、公園などに設置する様々な遊具や健康器具、休養施設の開発・製造、さらに遊具のメンテナンス(安全点検・修繕)を手掛けている。

「TVドラマの公園ロケ・シーンによく登場するグローブジャングル(地球儀型の回転するジャングルジム)は、1957年に当社が日本で初めて開発しました。聞くとよれば、開発者が銀座のビルに設置されていた広告塔を見て、デザインやアイデア(回転するという発想)がひらめいたとか。また、やじろべえのような構造の弓型シーソーを最初に開発したのも当社です」

こう語るのは、同社で総務部長を務める鎌田健二さん。さ



総務部長の鎌田健二さん(写真左)と、取締役羽村工場長の永尾重光さん(写真右)。

らに、ブランコは創業当初から手掛けてきたロングセラー製品で、国内でトップの納入実績を誇っているという。もちろん、杉並区内の公園などにも数多く設置されており、私たちは知らず知らずのうちに日都産業の製品と身近に接してきたのだ。

工場で働く社員たちが 実際に試して改良を重ねる

昔と比べて最近の遊具には個性的なデザインのものが増えており、社内にデザイナーを抱える日都産業はその点においても一歩先を進んできたと言える。主力製品の一つである幼児向けの「リンクミニ」がそれを象徴している。自分の動きに応じて前後に揺れるという仕掛け自体がいつの時代も子どもたちに大人気だが、驚くのは、馬やラッコ、カエル、恐竜などの生物から、自動車や船、新幹線といった乗り物まで、そのデザインのバリエーションが14種類にも及ぶこと。しかも、要望に沿って日本各地の“ゆるキャラ”をモチーフにしたデザインにも仕上げられるという。

「社内のデザイナーがスケッチを描き、それをもとに設計担当者が製図します。そして、模型を作って不具合などを確認しながら修正を重ね、実際に子どもたちに試作品で遊んでもらい、反応を確かめたうえで製品化しています」

と話すのは、同社羽村工場長の永尾重光さん。試作の課程では、工場で働く社員たちも自ら実際に遊具を使ってみるそうだ。たとえば、コツをつかめばロープにぶら下がったまま延々と何周も回り続けられる「カイトレール」も、難易度や危険性などを確かめつつ、何度も試作を重ねた。ちなみに、子どもには少々難しすぎた試作品の一つは、工場内にある社員の休憩スペースに設置されている。

オトナ向けの健康器具でも パイオニア的な存在!

狭い敷地にも対応して1台に様々な機能を組み合わせたコンビネーション遊具や、1~3歳の乳幼児を対象とした遊具シリーズ「りぐりぐ」など、日都産業は多種多様な遊具を取り扱っているが、実はオトナ向けの健康器具においてもパイオニア的存在だ。

「ストレッチなどの運動を補助する健康器具は、今でこそ公園でよく見かけるものとなっていますが、当社は34年も前からその開発に取り組んできたパイオニアです。当初は反応が今ひとつでしたが……」(永尾さん)

高齢者向けの健康器具にしても、実に18年も前の時点で業界初の製品を開発している。高齢化社会が進むにつれて、人々の健康維持への意識がどんどん高まっていくことを予見していたかのようだ。

部門別大賞受賞の弓型シーソーをはじめ、日都産業製の遊具はユニークで独創的なデザインのものも多く、子どもたちに大人気。



工場内の休憩スペースに設置されている「カイトレール」の試作品。昼食後などに社員たちが興じることも!

日都産業の歩み

- 1957(昭和32)年 日本初のグローブジャングルを発表
- 1964(昭和39)年 オリンピック東京大会組織委員会より感謝状を受ける
- 1978(昭和53)年 東京都羽村市に羽村工場を竣工
- 1983(昭和58)年 大阪市淀川区に関西営業所開設
- 1986(昭和61)年 弓型シーソーがグッドデザイン部門別大賞を受賞(公共空間部門)
波状鉄棒がグッドデザイン商品として選ばれる
- 1988(昭和63)年 パラレルハンガー(ぶらさがり系健康器具)がグッドデザイン商品に選ばれる
- 1994(平成6)年 都市公園コンクールでチューブ遊具が(社)日本公園緑地協会長賞を受賞
- 2000(平成12)年 埼玉県さいたま市に北関東営業所開設
- 2017(平成29)年 乳幼児向けシリーズ「りぐりぐ」が「第11回キッズデザイン賞」を受賞

社員に聞きました

「デザイン力」×「設計力」の開発体制と、安全・品質にこだわる「現場力」



御社の良いところって何ですか?

デザイン課
中島 奈穂子さん

日都産業の遊具は、固定概念にとらわれない自由な発想のものが多い。それはなぜか? 永尾さんはこう答える。

「やはり、当社の強みの一つは『デザイン力』ですね。ライバル会社とコンペで競い合うケースも少なくありませんが、社内のデザイナーが独創的なパース画(完成予想図)を描いてクライアント(発注主)に提案します。そして、もう一つの強みは、そのビジュアルを製品化に結びつけられる『設計力』にあります。独創的なデザインのものも製品にするのは決して容易なことではなく、デザイン課と設計課とのコンビネーションが重要となってきます」

その結果、目にした途端に子どもが夢中で駆け寄っていくようなデザインの遊具を実現しているのだ。デザイン課の一員である中島奈穂子さんは、大学のデザイン学科を卒業後、2013年に入社した。同課は羽村工場内にあるので、杉並区の自宅から通勤している。

「依頼された案件の内容に応じて、専任のデザイナーが、納入まで担当しています。個々のデザイナーの得意分野を活かすことが、お客様の満足度アップにつながるからです。自分も慣れ親しんだ遊具のデザインをすることはとても楽しい作業ですし、完成品で子どもたちが遊んでいるのを見ると嬉しいですね」

子どもたちのみならず、日都産業の遊具は社会的にもデザイン性が高く評価されており、冒頭でも触れた弓型シーソーは1986年にグッドデザイン公共空間部門別大賞を受賞した。また、波状鉄棒も同年にグッドデザイン商品に選ばれている。

ただし、同社はデザイン性だけを追求しているわけではない。デザイン課では、「子どもの安全が最優先」ということを前提としたうえで、各自が自由な発想で知恵を絞っているという。さらに、永尾さんはこうつけ加える。

「完成した設計図をもとに、安全・品質にこだわりながら製品を完成させる職人気質の『現場力』も当社の強みです」

安全性を最優先しつつ、子どもたちがよりたくましく育つ遊具を作るために…

子どものたちのケガを防ぐため
わずかなバリや凹凸も見逃さない

デザイナーと設計担当者との強力なタッグが子どもたちを惹きつける遊具を生み出していることは、4ページでも触れたとおりだ。では、もう一つの強みだという「現場力」はどんなかたちで発揮されて、高い安全性と品質を実現しているのだろうか？ ここ数十年で遊具の安全性は格段に高まり、たとえばブランコもシート部分の素材が耐候性ゴムに代わった。ブランコから落ちた子どもにシート部分が直撃しても、大ケガをするような恐れを大幅に軽減した。

だが、日都産業が心掛けている安全性への取り組みは、それだけにとどまらない。羽村工場技術部業務支援課課長の小倉太郎さんは次のように述べる。

「ほんのわずかでも部品の溶接・切断箇所バリが残っていたりすると、遊んでいた子どもがケガをしかねません。だから、厳しい規準を設けて、少しでも適合しない部品は不良品とします。また、子どもは想定外の行動を取ることがあり、思わぬところに頭や体を突っ込んで抜けなくなるような事故も起こりえます。なので、製品の完成後も子どもの頭や胴体のサイズを模した点検器具をあらゆる箇所に差し込み、入念な安全確認を行ってから出荷しています」



羽村工場の小倉さん。手に持つのは、子どもの頭部や胴体のサイズを示す点検器具。遊具の隙間に体が挟まるなどの事故を防ぐための検査に用いる。

「5S」を徹底することで
製造現場の気の緩みを防ぐ

各部品のバリや接続部分の凹凸などは、現場で働く人たちが実際に自分の手で触りながら点検。さらに、製造に携わる姿勢についても自分たち自身に厳しく問いかけているという。ちょっとした気の緩みが遊具の欠陥につながりかねないとの思いから、製造現場において「5S(整理、整頓、清掃、清潔、しつけ)」を徹底しているのだ。その結果、工場内は道具や部品、材料がきめ細かく管理されており、より円滑でミスが起こりにくい作業が進められる環境が整っている。

近年、子どもたちの身体能力の低下が問題視されているが、こうして安全性にこだわった遊具で存分に遊びながらたくましく育ててほしい——日都産業は自社製品にこうした思いを込めているのだろう。



ブランコの鎖部分はねじれにくく、絶対に外れないことが大前提となる条件。設計上はもちろん、実際に人の手でも必ず確認。



かつて木製だったブランコのシート部分には、耐候性ゴム素材を使用。丈夫で劣化しにくく、子どもがぶつかってもケガをしにくい。

「5S」を掲げて、整理整頓が行き届いた工場内。一つ一つの工具や部品の管理を徹底しており、削りクズなどのゴミも落ちていない。

遊び心を刺激する 新しい遊具たち

子どもたちが目を輝かせる遊具を、
社会に寄り添いながら開発し続ける日都産業。
まだ見ぬ遊具を生み出す心配りと遊び心に満ちている。

遊具は時代ごとに形を変える。

公園に行けば、幼い頃にはなかった遊具を見ることも多いことだろう。昔からあるようなブランコなどでも、細かな部分に改良が重ねられている。

それらは一朝一夕に作られたものでは決していない。

1年かけてヒアリングして開発

先述した、1~3歳の乳幼児対象の「りぐりぐ」は、開発に1年がかかった。デザイナーや設計の担当者が、定期的に保育施設に通い、先生や保護者などにヒアリングを行い続けて完成させた。

乳幼児の遊びやすさや安全性に配慮しただけではない。乳幼児が遊ぶ際には、保護者も共にいる。だから、保護者にとっても居心地の良いコミュニケーション空間であることを目指したという。

子どもたちが大喜び

日都産業は、年に1度、桃井原っぱ公園で行われる「すずなみフェスタ」にも出展している。

期間中、同社は製品である遊具を持ち込み設置する。当日は、実際に子どもたちが遊ぶ様子が見かけられる。

「子どもたちが元気に遊び続けるものですから、毎年、撤収



公園などに設置された遊具は乳幼児にはサイズが大きいこともある。「りぐりぐ」は乳幼児の体や遊び方に沿うように企画されている。

時間になっても、なかなか片づけられませんね」と笑う永尾さん。

さらに、同社は小学校からの工場見学を毎年、受け入れている。

目の前で鉄パイプが切断され、溶接される現場を見ながら、子どもたちは公園や校庭にある遊具がどのように作られているのかを学ぶ。見学の最中には子どもたちから歓声があがり、それが社員の働く意欲につながっている。「将来働きたい」と話してくる子どももいるそうだ。

自分も遊びたいと思えるものを

日都産業の社員たちは、ときには地道な努力も重ねながら、開発していく。

しかし、それは苦労ばかりの道のりではない。

小倉さんは話す。

「新しい遊具を考えるときには、自分も遊びたいと思えるものにすることが大事です。形ばかりの遊具では、子どもだって興味を持ちませんから」

大人目線の心配りと、子ども目線の遊び心。新しい遊具はそこから開発される。

これからも日都産業は、大人も子どもも、わくわくするような遊具を生み出すに違いない。

杉並区内の公園にある日都産業の遊具

公園名	遊具名	住所
大宮前公園	よちよちプレイエリア	杉並区宮前3丁目15番10号
善福寺公園	いろはコンビB変形	杉並区善福寺2丁目・3丁目
善福寺川緑地ヒコーキ広場	ヒコーキジャングル	杉並区成田東2丁目
なりむね児童遊園	いろはコンビ	杉並区成田東5丁目5番5号
久我山公園	2人用ブランコ	杉並区久我山3丁目37番3号
久我山公園	5段サーキュラーキャッスル	杉並区久我山3丁目37番3号
浜田山公園	コンビブランコ	杉並区浜田山2丁目17番1号
浜田山公園	たんぼぼ	杉並区浜田山2丁目17番1号
阿佐谷東公園	枝型2人用ブランコ	杉並区阿佐谷南1丁目42番6号



区内のあちこちに同社の遊具は設置されている。(なりむね児童遊園)

沿

SO U

街道に建ち並ぶ商店には、街の個性が色濃く表れます。杉並区の街道沿いに、多く建ち並ぶのは長きにわたって生活文化に密着してきた商店。ここで紹介する2社もまた、街道沿いで100年以上、個性を磨きあげながら地元の人々に親しまれています。

竹清堂 (ちくせいどう)

創業112年、竹工芸品を制作・販売
 素材を生かした逸品が並ぶ



竹の厚さや使う部位によって、光の透け具合を調整した照明器具。店内にはオリエンタルな雰囲気漂う。



三代目の田中旭祥(憲一)さん。その技術を学びたいと、国内はもちろん、フランスなど海外から訪れる方もいる。



真ん中で均等に割るのが難しいという竹割り。用いる竹割包丁は使い続けるうちに摩擦ですり減り形が変わっていく。



作業場は店舗と隣合う。海外からの見学希望者や、修行希望者も訪れる。

下高井戸で明治時代から竹製品を作り続ける竹清堂^{ひさし}。庇に置かれた象のオブジェも竹で作られている。店の前を、童謡「ぞうさん」を歌いながら横切る子どももいるそうだ。「竹は独特の素材。いろいろな形が作りやすいですね」と話す竹清堂の3代目、田中旭祥さん。工芸品や、能楽につかわれる作り物などを制作している。

竹清堂は旭祥さんの祖父が創業した。2代目は旭祥さんの父、現在ともに働く4代目の茂樹さんは息子。家業と決まっているわけではない。「継ごうなんて思わなかった」と、2人は口をそろえる。それでも親の背中を見て学び仕事に選んだ。

材料となる竹ひごは、細いものでは幅1mm厚さ0.25mmにもなる。「『竹割り3年』とも言って、竹から材料を取り出す技術を身につけるまでに3年かかる」と旭祥さん。編み方や染め方など追求できる余地は広く、奥深い。

- 会社名: 有限会社竹清堂
- 所在地: 〒168-0073 杉並区下高井戸3-1-2
- 代表取締役: 田中憲一
- 設立: 1907(明治40)年
- 事業内容: 竹工芸品の制作・販売
- TEL.03-3307-3710
- <https://chikuseido.com/>



和田サイクル (わださいくる)

ニッチなラインナップで個性際立つ
 国内外からファンが訪れる自転車店



従業員は4人。土日は多くの来客で手が回らないそう。午後からの開店にした理由は、多忙さの緩和のため。



コンパクトに折りたたまれた自転車。店内に所狭しと並ぶ。



天井から逆さに飾られた自転車。店内360度、自転車がいっぱい。



良夫さん自身、BROMPTON製の自転車を愛用。しっかりスピードが出せる上に、小さく綺麗にたためる点が長所と話す。



軒先に並ぶ試乗車の数々。常設されている試乗用の折りたたみ自転車が多いことも特徴的。

午後からしか開かない自転車店が、青梅街道沿いにある。軒先にはタイヤ径の小さなミニベロや折りたたみ自転車がちり並ぶ。店内に入れば、天井まで自転車がいっぱい。実は1階だけでは収まらず2階にも置いている。

この風変わった自転車店、和田サイクルは1917年、現在地よりも桃井原っぱ公園に近い場所で創業した。中島飛行機東京工場やその後入れ替わった企業の従業員たちが通勤の足とする自転車の整備などをしてきたという。

創業者の孫にあたる現店主、和田良夫さんは幼いときから車輪を組み立てるなど、自転車の扱いには慣れて育ってきた。

店に立ったのは25歳頃。自主サイクリングクラブにお客様を誘い、月1回以上はサイクリング。「近所の小学生も集めて、多いときは30人くらいで行ったよ」。当時の小学生は、大人になった今も店に顔を出す。

- 会社名: 和田サイクル
- 所在地: 〒167-0034 杉並区桃井4-1-1
- 代表取締役: 和田良夫
- 設立: 1917(大正6)年
- 事業内容: 自転車の販売・整備
- TEL.03-3399-3741
- <https://www.wadacycle.jp/>



今でもお客様との交流は多い。毎年1月3日には、お客様主導で「和田サイクル新春ポタリング」が開かれ、10年以上も続く。

最大の特徴である、自転車のラインナップは良夫さんの代から。「折りたたみ自転車が出てきて『面白いなあ』と揃え始めた」。そこから数は増え、現在、イギリスの折りたたみ自転車メーカーであるBROMPTONのものだけで70台以上。

一方、いわゆるママチャリなどのバンク修理も受ける。「店ではオレが一番、修理をやってるよ」と良夫さんは笑う。区内の小学校へ交通安全教室に出向くこともあれば、シルバー人材センターによるリサイクル自転車の整備も手伝う。

「杉並は落ち着く。善福寺川沿いをサイクリングするのも良い。桜の季節の和田堀公園はすごく綺麗だしね」

ローカルに根付きながら、ハイクオリティな品まで扱う和田サイクル。その気概がファンの心をつかんで離さない。

もっと知りたい すぎなみのこと



販促グッズとして、多彩なデザインで展開するペーパーコースターとカップスリーブ。



「社名の由来には『三善の策』説と『3つの仕事を同時に引き受けた』説がありますが、もはや真相は不明」と代表取締役社長の阿部英徳さん(写真右)。「4年前から始めたカップスリーブも予想以上の反響です」と紙業部課長の渡辺大さん(写真左)。

終戦直後、日本で初めて ペーパーコースターを製造販売。 今なお、販促グッズとして 根強い人気を誇る

株式会社三善

荻窪に本社を構える三善は、なかなか一言では説明しきれない会社だ。その設立は、終戦直後にGHQ(連合軍最高司令官総司令部)が実施した財閥解体の頃まで遡る。1951(昭和26)年、旧安田財閥系の安田保善社出身者数人が集って創業したという。

「当時は、終戦直後で様々な物資が不足していました。そこで、外国書籍を輸入販売する一方、国内で初めてペーパーコースターの製造販売に乗り出しました。進駐軍の将校クラブで使われていたペーパーコースターに目をつけ、実用的で広告品としても有望だと当時の経営陣は考えたようです」

こう説明するのは、6代目の代表取締役社長である阿部英徳さんだ。当時の国内で、ペーパーコースターは非常に物珍しい存在。これに店名や住所、電話番号などを印刷すれば、広告宣伝につながるわけだ。ただ、やがて日本は高度経済成長期を迎え、次第にどこでも見かけるものとなっていった。

こうした時代の変化を見据えて、三善は精密小型モーターをはじめとする電子部品販売にも進出。紙の分野でも蚊取り・防虫マットに使用する吸水性の高い



同じく創業以来の主力ビジネスである洋書の輸入も続ける一方、海外の学習教材まで手を広げる。

厚紙で国内トップの実績を獲得し、最近ではホットドリンクの持ち手となるカップスリーブでも販路を拡大。メーカーとして、世の中の様々なニーズに応じていったのだ。一方で、依然としてペーパーコースターの製造販売も主力事業である。紙事業部課長の渡辺大さんは次のように語る。

「濡れると絵が浮き出る浮絵コースターなど、新しい試みにも積極的に取り組んでいますし、気に入ったら気軽に持ち帰られるので、販促グッズとして根強い人気です。オフセット印刷にも対応していますが、昔ながらの活版印刷にこだわっているのも当社の特徴です」

現在、一般的な印刷といえばオフセット(平版)印刷と呼ばれる手法だ。版と紙が直接触れずに印刷できるため、大量刷りや多色刷りなどに適している。これに対し、中世のグーテンベルクに端を発する活版印刷は、凸版を紙に押しつける。その結果、印刷された線画や文字に風合いが出るので、最近では名刺や結婚式の案内状、年賀状などに用いられることが多くなってきた。

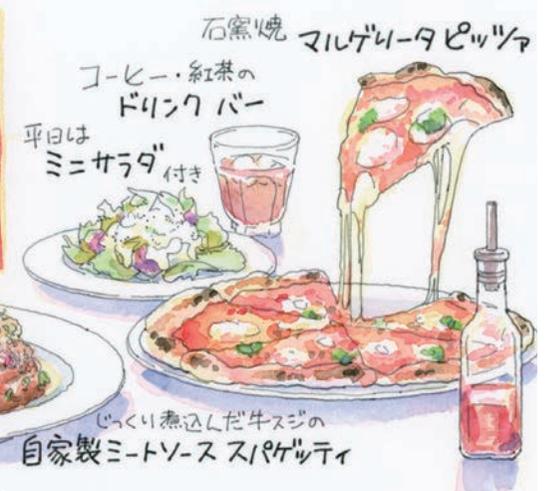
オフセット印刷を見慣れている世代にとって、活版の印字は斬新に映るらしい。活版印刷によるペーパーコースターの販促グッズは、「1周回ってむしろ新しい」という印象を与えそうだ。

- 会社名:株式会社三善
- 所在地:〒167-0032 杉並区天沼2-2-3(本社)
- 代表取締役社長:阿部英徳
- 設立:1951(昭和26)年
- 事業内容:ペーパーコースターの製造・販売、外国書籍の輸入・販売、電子部品の販売
- TEL.03-3398-9161(代表)
- http://www.miyoshiweb.co.jp/



すぎなみ オススメ食堂

本誌P7で紹介した
「和田サイクル」の
スタッフのオススメ!



この地に惚れて開店、地元で愛されて5年 親しみやすくも本格的なイタリアンレストラン

路地に一步入れば静かな住宅街が広がる青梅街道沿いの「ダ・マサ」。手間暇かけた味わい深いイタリア料理を手軽な価格で楽しめます。さらに、ワインソムリエが選ぶ高級店レベルのワインを最適な温度とグラスで提供、これもまたリーズナブルなお値段。ランチはもちろんディナーにも寄りたくなるお店です。

- 所在地:〒167-0034 杉並区桃井4-1-2
- TEL.03-6913-9858
- 定休日:不定期(下記サイト参照)
- 【Facebook】https://www.facebook.com/Da-Masa-Pizza-al-Forno-499764006852634/



杉並区産業振興センター

〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-5347-9077(就労・経営支援係)

杉並区内産業のさらなる発展を図るため、区内産業三団体(東京商工会議所杉並支部、杉並区商店会連合会、杉並産業協会)と同じフロアに設置した区の産業振興部門です。それぞれの団体と連携しながら、商店街や中小企業の支援、観光・アニメ事業の推進、都市農業の振興など、区内産業の活性化に向けた取り組みを行っています。

■主な取扱業務

- 中小企業資金の融資あっせん、商工相談
- 就労支援、創業支援
- 商店街の各種支援事業
- 観光事業の推進、アニメの振興
- 特定商業施設に関する届出
- 都市農業の振興、区民農園の管理
- 中小企業勤労者福祉事業

すぎなみ産 vol.3 令和元年10月発行
編集・発行:杉並区産業振興センター
〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-5347-9077

登録印刷番号
31-0060



杉並産業協会

〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-3220-1231

杉並区内の法人および個人を中心とした事業主で組織運営されている唯一の産業団体です。労働保険事務組合として労働保険の取り扱いも行っていきます。会員企業には労働保険事務組合への加入の他にも従業員福利厚生のための健康診断、レクリエーションの企画や事業主の皆様には優良工場見学、講演会、賀詞交歓会等の開催などを行っています。

■主な取扱業務

- 関係官庁に対する届出書類の記入代行・指導
- 労働保険事務組合の運営
- 講演会・交流会の開催
- 団体への表彰者の推薦
- 会員企業に勤める従業員の方への福利厚生事業
- 会報の発行
- 会員間の親睦事業

制作:杉並産業協会
クリエイティブ・ディレクター/アート・ディレクター:岸部浩三
ライター:大西洋平
エディター:三坂輝
カメラマン:豊田佳弘(表紙・p1~8)
イラストレーター:柿崎えま

すぎなみ産 発刊にあたって

杉並の仕事は面白い!

約20,000の事業所と、その仕事。

「すぎなみ産」は、杉並区に産まれた仕事を集めました。

自然と生活が混じり合う、暮らしやすいこの街に、

多種多様な産業は結びついています。

面白がって、面白い。

好きなことを楽しんでやって産まれた身近な物事。

杉並発の産業は、こんな顔立ちでした。

杉並の仕事は面白い!

